

Title	弱い合成性はなぜ「使えない」のか
Sub Title	Weak compositionality is just 'useless'
Author	高谷, 遼平(Takaya, Ryōhei)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2019
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.143 (2019. 3) ,p.1- 29
JaLC DOI	
Abstract	Weak compositionality, which is now explicitly endorsed by Truth Conditional Pragmatists and some Relevance Theorists, is a new notion of compositionality that aims to reconcile a vast range of context-dependency of semantic content with the project of formal semantics. Since this notion allows a semantic content of a complex expression at a context to be determined by the semantic contents of its constituents at that context, its structure, and the context itself, many semantic phenomena or analyses which were labeled as non-compositional can still be compositional in this weak sense. In this paper, I examine the status of weak compositionality in two different respects and claim that this notion cannot have any significance in formal semantic inquiries. First, although Truth Conditional Pragmatics seems to need the notion, careful reflections on the way how utterance interpretations are modeled in this theory show that a simpler notion of compositionality is enough for the theory to derive semantic contents. I, then, turn my eyes on the formal definition of weak compositionality and clarify when and how the notion does or does not hold formally. This consideration leads us to a difficulty of identifying contextual factors which can play an expected role in the formal definition, and so I conclude that weak compositionality is just useless.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000143-0001

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

弱い合成性はなぜ「使えない」のか

— 高 谷 遼 平* —

Weak Compositionality is Just ‘Useless’*Ryohei Takaya*

Weak compositionality, which is now explicitly endorsed by Truth Conditional Pragmatists and some Relevance Theorists, is a new notion of compositionality that aims to reconcile a vast range of context-dependency of semantic content with the project of formal semantics. Since this notion allows a semantic content of a complex expression at a context to be determined by the semantic contents of its constituents at that context, its structure, and the context itself, many semantic phenomena or analyses which were labeled as non-compositional can still be compositional in this weak sense. In this paper, I examine the status of weak compositionality in two different respects and claim that this notion cannot have any significance in formal semantic inquiries. First, although Truth Conditional Pragmatics seems to need the notion, careful reflections on the way how utterance interpretations are modeled in this theory show that a simpler notion of compositionality is enough for the theory to derive semantic contents. I, then, turn my eyes on the formal definition of weak compositionality and clarify when and how the notion does or does not hold formally. This consideration leads us to a difficulty of identifying contextual factors which can play an expected role in the formal definition, and so I conclude that weak compositionality is just useless.

* 慶應義塾大学

弱い合成性はなぜ「使えない」のか

はじめに

本稿は、弱い合成性と呼ばれる合成性概念に関する論考である。近年議論が盛んな意味論と語用論の境界問題において、弱い合成性とは、F. レカナティという先導者のもと一定の支持を集めている真理条件的語用論（以下、TCP）において主張される広範な文脈的影響をその定義に組み込んだ合成性であるが、その文脈依存性の高さゆえ非常に評価が難しい。本稿の目的は、弱い合成性の適用事例や文脈概念に関する議論を通して、この新たな合成性概念に何ら有用性がないと示すことである。

一般的な合成性は「複合表現の意味はそこに含まれる単純表現の意味と構成規則によって決定される」というテーゼのもと語られ、形式的な意味論はこの要求を満たさなければならないと考えられてきた。一方で弱い合成性は「複合表現の意味はそこに含まれる単純表現の意味と構成規則、そして文脈そのものによって決定される」とされ、一般的な合成性とは異なり意味の合成に際する文脈の影響が認められている。弱い合成性の利点は、ここでの文脈の影響を非常に大きなものにすることで、一般的な合成性に関して問題がある分析や現象について、それらが弱いみながらも合成的であると主張しうることである。

しかしながら、TCP との関連から生まれたという背景から、弱い合成性は常に TCP の妥当性という文脈でのみ扱われ、弱い合成性そのものが主題となることはほとんどなかった。本稿は、TCP はもちろんその他の意味論的理論での合成性のあり方を論じ、それらにおいて弱い合成性は何ら役立つ概念とはならないと示すことで、意味論的探究において弱い合成性という新たな概念を措定する理由はないと主張する。

本稿は以下のように進む。まず1節では、本稿で主に使用する文脈鋭敏の意味論が導入され、そのもとで弱い合成性を含む三つの合成性が形式的に定義される。ここでは、弱い合成性がその他の合成性とどのように関係するのかが明らかにされる。2節では、1節で導入された文脈鋭敏の意味

論との比較という形で TCP を概観し、なぜ TCP が弱い合成性を必要とするとされてきたのかを確認する。続く3節では、TCP に向けられている批判やそれに対する再反論を参考に、TCP は弱い合成性に依拠することなく定式化可能であることが示される。最後に4節では、TCP から離れて合成性概念自体の定義やその役割、そして文脈の内実に関する議論を通して、やはり弱い合成性が意義ある概念とはならないと論じる。

1. 弱い合成性とはなにか？

ではまず、本稿で採用する文脈鋭敏の意味論を D. カプランによる二重指標意味論に即して概説しよう¹。カプラン的二重指標意味論の最大の特徴は、その名の通り、表現の外延が文脈と値踏みの状況という二つの指標に依存しうると考えることにある。値踏みの状況とは従来の可能世界意味論における可能世界に対応し、カプランの意味論においては時点と可能世界という二つのパラメータの順序対から成る一方、文脈とはその表現の発話に際する四つのパラメーター—発話者、発話時点、発話場所、発話世界—によって構成され、文脈鋭敏な表現の意味論に関わる。

そしてこれに対応し、カプランは意味内容と意味特性という二つのレベルの意味を明確に区別した。表現の意味内容とは可能世界意味論における内包に対応し、値踏みの状況から外延への関数として定義される一方、意味特性は表現自体がもつ意味、もしくは様々な文脈において表現がどのような意味内容をもつのかを定める規則であり、文脈から意味内容への関数として定義される。すなわち、表現はまずその意味特性と文脈によって意味内容が決定され、その後意味内容と値踏みの状況によって外延が決定されるという二段階のプロセスを経るのである。

例えば文脈非鋭敏な表現 ‘philosopher’ に関して、この表現はいかなる文脈で発話されたとしても同一の意味内容をもつ一方で、値踏みの状況によって異なる外延をもつ。一方で ‘I’ などの指標詞は、文脈の発話

弱い合成性はなぜ「使えない」のか

者パラメータによってその外延が決定されたならば、いかなる値踏みの状況においても同一の指示対象をもつ直接指示的表現である。また、‘tall’などの表現は一もちろん様々な立場はあるが一、発話文脈によってその高さの基準が変動するうえ、文脈によって固定された特定の基準のもとでどのような対象が高身長なのかは値踏みの状況によって変わりうるため、文脈と値踏みの状況いずれにも鋭敏な表現として分析される。

しかしながら、本稿は意味内容及びそれに類する意味概念に関する合成性の問題を主題としているため、外延に関して論じることがほとんどない。したがって、形式的意味論において一般的に使用される関数 $\llbracket \cdot \rrbracket$ は外延ではなく内容を返す関数としよう。すなわち、カプラン的な文脈鋭敏の意味論において、行為者 a 、時点 t 、場所 l 、世界 w 、そして割り当て関数 g から成る文脈 c における表現 e の意味内容は $\llbracket e \rrbracket^c (= \llbracket e \rrbracket^{(a, t, l, w, g)})$ と表され²、意味特性は文脈に関して抽象された $\lambda c. \llbracket e \rrbracket^c$ と表される。

では次に、二つの合成性概念を定義しよう³。まず一つ目は、意味特性の合成性である。これは上記のように表現自体の意味の合成性であり、この合成性は形式的意味論のほとんどすべてにおいて成立するといつてよい。そして二つ目は意味内容の合成性であり、これはいわゆる可能世界意味論はもちろん、カプラン的な二重指標意味論でも成立するとされる。

意味特性の合成性 C_{CH} :

すべての統語論的規則 σ について、次のような意味論的操作 γ_σ が存在する:

$$\mu_{CH}(\sigma(e_1, \dots, e_n)) = \gamma_\sigma(\mu_{CH}(e_1), \dots, \mu_{CH}(e_n))$$

意味内容の合成性 C_{CO} :

すべての統語論的規則 σ について、次のような意味論的操作 γ_σ が存在する:

$$\mu_{CO}(\sigma(e_1, \dots, e_n), c) = \gamma_\sigma(\mu_{CO}(e_1, c), \dots, \mu_{CO}(e_n, c))$$

ここで、 μ_{CH} はそれぞれの表現に対してその意味特性を割り当てる意味関数、そして μ_{CO} はそれぞれの表現と文脈をとってその表現のその文脈における内容を割り当てる意味関数である。このとき c は、カプラン的文脈であつてもより広い定義の文脈であつても構わない。

まず C_{CH} に関して、これは「複合表現の意味特性はそこに含まれる単純表現の意味特性と構成規則によって（関数的に）決定される」ことをいみしており、表現の意味特性は変動しえないということに鑑みれば、 C_{CH} が成立するのは容易に理解できる。次に C_{CO} だが、この合成性こそ言語哲学においてその成立が期待されている概念であり、また多くの意味論的議論において前提とされているものでもある。 C_{CO} は大まかにいって「ある文脈における複合表現の意味内容は、その表現に含まれる単純表現のその文脈における意味内容と構成規則によって（関数的に）決定される」というものであり、例えば内包や意味論的値が合成的であるという形で言及される際の合成性である。

一般的な内包的意味論においては、その意味論において現れる意味がせいぜい内包、言い換えれば、意味特性に当たるより抽象的な意味概念は登場しないため、カプランの意味論において C_{CH} が空虚に成立するのと同じみで C_{CO} は空虚に成立する。その一方でカプランの意味論での意味内容は文脈に鋭敏であるため、文脈の変動によっては C_{CO} が成立しないような現象が存在しうる。

C_{CO} が成立しない一つ目の現象は、いわゆるモンスターオペレータに関するものである。モンスターとはカプランの意味論において文脈のパラメータを変動させるオペレータとされ、例えば発話者パラメータを変動させるモンスターの作用域にある指標詞 'I' はその指示対象が現実の発話者とは異なる可能性がある。この場合、いったん固定された現実の文脈における指示対象とは異なる対象がモンスターを含む文全体の意味内容に貢献することになり、したがって C_{CO} は成立しない。モンスターについて

弱い合成性はなぜ「使えない」のか

は4節で再び論じることになる。

C_{CO} を危機に晒す第二の現象は、いわゆる明言されない構成素 (unarticulated constituent) である。明言されない構成素とは、かつて J. ペリーがその存在を指摘し⁴、その後様々な形で論じられてきた現象であるが、ここでは例を用いて明言されない構成素と C_{CO} の関係をみていこう。

(1) It rains.

この文が東京で発話されたとき、東京で雨が降っているという意味内容を表しているように思える。すなわち、意味内容には場所が含まれているように思える。このような直観をカプラン的意味論で分析する場合、取りうる選択肢は以下のようなものだろう。ここで大文字の英語は内容を表している。

(2) $\llbracket It \text{ rains} \rrbracket^c = IT \text{ RAINS IN } l_c$

(3) $\llbracket It \text{ rains}(t) \rrbracket^c = IT \text{ RAINS IN } g_c(t)$

前者は ‘rains’ が文脈の場所パラメータに鋭敏な表現であり、その鋭敏性によって意味内容に場所が含まれるとしている。対して後者は、‘rains’ がそもそも論理形式のレベルで場所に関する変項 t を含んでおり、文脈の割り当て関数 g_c における t の値が場所として意味内容に含まれることとなる。(2) と (3) は場所に関する文脈鋭敏性を異なる要素に還元しており、したがって (1) が何らかのオペレータの内部に置かれた場合などで異なる振る舞いをするが、しかし目下の議論において重要なのは、いずれの選択肢をとったとしてもカプラン的な文脈概念のもとで C_{CO} が成立するということである。というのも、いずれも場所に関する情報をカプラン的な文脈に含まれる時点パラメータや割り当て関数、すなわち意味論的な

文脈に還元しており、その限りの文脈的情報を補うことによって意味内容が得られると考えているからである。

以上のような分析に対し、レカナティを始めとする TCP 論者は、(1) の意味内容に直観的には場所が含まれないような文脈が存在するため、‘rains’ はその意味特性のうちに場所に関する情報をもつべきではないと主張する⁵。もしも彼らの主張が正しく、‘It’ はもちろん ‘rains’ もまた場所を特定するような意味特性をもたないならば、(2) や (3) の分析は正しくないということになる。なぜなら、これらの分析において場所は特定されなければならない要素として意味論的に強制されており、いかなる文脈において (1) が発話されたとしても意味内容は場所に関して特定のでなければならないからである。このような問題に対して TCP 論者は、場所は意味論的には要請されないが必要となりうる要素、言い換えれば、文全体の論理形式や意味特性には現れないが、しかし時には意味内容に含まれる要素であると考え、このような要素がまさに明言されない構成素であり、もしも明言されない構成素が本当に存在するのならば、(1) が東京で発話されたとき、東京という場所が意味内容に含まれるのは意味論的ではない何らかの文脈的影響によるものということになる。

明言されない構成素が C_{CO} を危機に晒すのは明らかだろう。なぜならば、明言されない構成素は、単純表現の意味内容がいったん決定されているのにも関わらずそれらが合成される段階において新たな解釈が生まれる可能性を示唆するからである。しかしながら、明言されない構成素の存在そのものが直ちに C_{CO} の不成立をいみするのではないことには注意が必要である。というのも、 C_{CO} の定義自体は、実は単純表現の意味内容がその意味特性とカプラン的文脈のみによって決定されなければならないという含意はもっていないからである。意味関数 μ_{CO} はあくまでも表現と文脈によって内容が決定されるということのみを表しており、その際の文脈がカプラン的な文脈か否かは問われていない。もしも (1) において場所が

弱い合成性はなぜ「使えない」のか

明言されない構成素であり (2) や (3) の分析が適切でないとしても、
'rains' (もしくは 'It') という単純表現がカプラン的な文脈を超える文脈的影響によって場所を含むような内容をもつ場合、 C_{CO} は成立するのである。

しかし、以上から C_{CO} が本当のいみで成立しない場合がみえてくる。すなわち、単純表現ではなく複合表現の意味内容が決定される段階で文脈が影響する場合、 C_{CO} は成立しない。なぜならば、 C_{CO} において文脈は単純表現の内容のみに関わるのであり、その後の影響は認められていないからである。では、本稿の主題である弱い合成性を定義しよう。

意味内容の弱い合成性 C_{WCO} :

すべての統語論的規則 σ について、次のような意味論的操作 γ_σ が存在する:

$$\mu_{WCO}(\sigma(e_1, \dots, e_n), c) = \gamma_\sigma(\mu_{WCO}(e_1, c), \dots, \mu_{WCO}(e_n, c), c)$$

一見すると C_{CO} と違いがないようにもみえるが、しかし C_{WCO} においては意味論的操作 γ_σ が意味内容のみならず文脈自体をその項としてとり、したがって「ある文脈における複合表現の意味内容は、その表現に含まれる単純表現のその文脈における意味内容と構成規則、そして文脈そのものによって (関数的に) 決定される」というように述べることができる。「文脈そのもの」にどれほどの情報を要請するのかはもちろん理論によって異なりうるが、しかし明言されない構成素がこのような文脈の影響によって文全体の意味内容の一部となる場合が存在するならば、 C_{WCO} のような意味の決定プロセスもまた存在するということになる。

(1) における場所の他にも、例えば色述語における葉の色の判断基準—単なる見た目かそれとも植物学的な基準—、量化表現における量化領域の制限—地球上すべての女性かそれともこの部屋にいる女性—、また所有格が使用された際の対象との関係—アンが所有している本かそれともア

ンが執筆した本か一等、明言されない構成素を用いて分析される現象は数多い⁶。TCP 論者によれば、それらの多くは C_{wco} のもとでのみ合成的になりうる。したがって、成立可能性に関していえば、 C_{wco} は C_{co} より成立しやすい合成性概念ということになる。

2. 真理条件的語用論

本節では、弱い合成性 C_{wco} を明示的に支持している TCP を概観し、なぜ TCP において C_{wco} が必要だといわれるのかみていく。

本題に入る前に、二つ注意がある。まず一つ目は、以下の議論はあくまでも弱い合成性に関する議論であるということである。すなわち、TCP そのものの妥当性や可能性に関して一かなり否定的ではあるが一論じるものではない。次に二つ目は、TCP という術語に関するものである。レカナティの理論と並んで関連性理論もまた TCP と呼ばれることがあるが、これは両者がともに文の意味内容（関連性理論における表意 (explicature)）の導出にあたって意味特性（関連性理論における言語形式 (linguistic form)）に制限されない文脈の影響を認めるからである。しかしながら、レカナティがカプラン的な真理条件の意味論をベースにしているのに対し、関連性理論はそもそも真理条件の意味論ではなく内在的な表示の意味論と思考の言語における外在の意味論のセットによって意味内容が得られると考えており、そのため自身の意味論において C_{ch} 以上の合成性が成立しないことを認めている⁷。以上のような背景から、たとえ両者が結果的に類比的な示唆をもつ理論であったとしても、少なくとも形式的側面、特に合成性に関する態度は大きく異なっており、したがって本稿は基本的にレカナティによる TCP のみを考察対象とする。

また、そもそもなぜ TCP が C_{wco} を措定したのかについても一言述べておこう。上述のように、TCP は一般的な形式的意味論を踏襲しているが、これは自らの理論に合成性という制約を課しているに等しい。なぜな

弱い合成性はなぜ「使えない」のか

ら、本稿の導入でも触れたように、形式的な意味論は合成性を満たすことが求められているからである。そして、TCP はカプランの意味論をたたき台にしているという背景から、そこで求められる合成性とはカプランの意味論で成立するとされるもの、すなわち C_{CO} に類比的な概念である必要があったのである。

では、TCP の特徴をみていこう⁸。上述のように、多くの文は文脈的情報を補うことによってその意味内容が得られるが、カプランの意味論はこのような文脈鋭敏性をすべて表現の意味特性もしくは論理形式上の情報へと還元する。逆にいえば、それらから要請される以上の文脈的要素が意味内容を変動させることはない。これに対して TCP は、モジュレーション (modulation) と呼ばれる、語用論的文脈による意味内容の変動が存在すると主張しており、モジュレーションによって上記の明言されない構成要素を含む文、またメタファーやメトニミーなどを表現する文さえも合成的に導出可能だとする。ここでの「語用論的」とは、意味特性や論理形式に要請されない文脈の影響を指すが、そのなかには話者の意図を始めとしてカプラン的文脈には含まれないが発話時に顕著であるようなあらゆる情報が含まれる。モジュレーションとは言語的要因によらない文脈の意味内容に対する影響であり、これを認めることが TCP とその他の意味論的理論を分かつ最大の要因であるといえるだろう。

モジュレーションは、形式的には次のように関数的に分析される。以下ではカプラン的な意味内容を K 内容、そして TCP におけるモジュレートされた意味内容を M 内容とする。

$$(4) \llbracket e \rrbracket_M^c = \text{mod}(e, c) (\llbracket e \rrbracket^c)$$

(5) The city is asleep.

$$(6) \llbracket \text{asleep} \rrbracket_M^c = \text{mod}(\text{'asleep'}, c) (\llbracket \text{asleep} \rrbracket^c)$$

= QUIET AND SHOWING LITTLE ACTIVITY

まず (4) について, $\llbracket e \rrbracket_M$ は M 内容を表し, 関数 $mod(e, c)$ の項に K 内容 $\llbracket e \rrbracket^c$ をとることで M 内容が得られることをいみしている. ここでの関数 mod が表現 e と文脈 c をとり K 内容からこの文脈における適切な解釈, すなわち M 内容を与える新たな関数 $mod(e, c)$ を返すことで, 表現は様々な意味内容をもちうるのである. (5) の文を例にみていこう. (5) には ‘asleep’ がメタファーであるような解釈が存在し, 街が静まりかえっており活動的ではないという M 内容が表現される. このような読みが顕著なとき, (6) が示しているように, ‘asleep’ には寝ているという K 内容から, $mod('asleep', c)$ によって静かで活動的ではないという M 内容が与えられ, これがその他の表現の M 内容と合成されることで最終的にはカプランの意味論において決して得られないメタフォリックな解釈が合成的に得られることになる.

そもそもメタファーが意味論的な現象なのか否かという問題はありますが, このようなプロセスによって TCP はこれまでの形式的意味論では説明し得なかった様々な現象を分析する. ただし, 合成性に関しては注意が必要である. 前節で触れたように, 上記のようなモジュレーションが存在したとしても C_{CO} は成立するからである. (6) において ‘asleep’ はその意味特性からは得られない静かで活動的でないという M 内容をもつが, C_{CO} の定義によれば, たとえ単純表現がその意味特性から要請されていない内容をもったとしても, その内容がその他の表現と合成される際に新たな文脈の影響が存在しなければよい. (5) の M 内容はカプラン的文脈ではなく語用論的文脈の影響を受けているためカプランの意味論においては導出されないが, 合成性の観点からいえば単純表現の内容決定に際する語用論的影響は C_{CO} と両立可能ということになる.

では, カプランの意味論と TCP の違いは単純表現の内容決定に関する文脈情報の多さのみなのか. そうではない. 明言されない構成素についてもう一度考えよう. 先の (1) の場合, 直観的には ‘It’ と ‘rains’ の M

弱い合成性はなぜ「使えない」のか

内容の合成の段階で文脈が影響するというより、むしろ ‘rains’ の K 内容がモジュレートされる際に場所が特定されるように思える。しかしながら、(5) の M 内容は (6) とは異なるモジュレーションによって得られると考えることもできる。

$$\begin{aligned}
 (7) \quad & \llbracket (5) \rrbracket_M^c \\
 &= \text{mod}((5), c) (\gamma_{CO\sigma}(\text{mod}('the city', c) \llbracket the city \rrbracket^c), \\
 &\quad (\text{mod}('is asleep', c) \llbracket is asleep \rrbracket^c)) \\
 &= \text{mod}((5), c) (\gamma_{CO\sigma}(\text{THE CITY, BEING ASLEEP})) \\
 &= \gamma_{WCO\sigma}(\text{THE CITY, BEING ASLEEP}, c)) \\
 &= \text{THE CITY IS QUIET AND SHOWING LITTLE} \\
 &\quad \text{ACTIVITY}
 \end{aligned}$$

ここで、意味論的操作 $\gamma_{CO\sigma}$ は一般的な関数適用であり、 $\gamma_{WCO\sigma}$ は $\gamma_{CO\sigma}$ に文脈 c を項として加えた意味論的操作である。(7) が示しているのは、‘(is) asleep’ のメタフォリックな内容は単独でモジュレートされるのではなく、‘the city’ の M 内容と合成される段階に生じているという可能性がある。‘asleep’ がメタフォリックに使用されていると判明するのは述定される対象が与えられたあとであるという直観に鑑みれば、(7) のような仕方でメタファーが表現されると考える方がより自然かもしれない。

(7) において C_{CO} は成立せず、しかし C_{WCO} は成立しているのは明らかだろう。式の三行目が示しているように、複合表現の内容をモジュレートする段階はそこに含まれる単純表現の内容と文脈自体をとる意味論的操作によって表現可能であり、この意味論的操作こそ C_{WCO} において使用されるものなのである。このような複合表現に対するモジュレーションの存在が、TCP が C_{WCO} を必要とするといわれる理由である。

3. モジュールーションと弱い合成性

ではここから、TCPにおいて以上のように使用される C_{wco} が本当に有効な概念であるといえるのかみていこう。 C_{wco} の有効性はTCPへ対する代表的な批判である解釈の過多問題と大きく関わるものだが、この問題とはおおよそ次のように要約される⁹。TCPは確かにカプラン的意味論を代表とするこれまでの形式的意味論では分析できなかった意味内容を合成的に導出可能だが、同時に実際には表現されていないような意味内容を排除することができない。すなわち、文脈の影響が多であるがゆえに、直観的に表現されている意味内容のみならず、その他の多くの意味内容もまた導かれてしまう、という批判である。次の文について、

(8) Every man likes Sally.

(9) *EVERY MAN_i LIKES SALLY AND HIS_i MOTHER*

(8)の発話に際して、サリーを好きな男はみな自分自身の母親を好きであるということが会話の参加者の間で共有されていたとしよう。このとき、TCPの観点からいえば(8)はモジュールーションによって十分に(9)を表現しうるはずである。しかしながら実際は、いかなる文脈であったとしても、(8)が(9)を意味内容としてもつようなことは考えられない。したがって、TCPは不可能な解釈の導出を防止できず、誤っている。

このような批判に対してTCP論者（及び一部の関連性理論論者）は、モジュールーションは様々な形で制限されるため、上記のような解釈の過多は生じないと論じている。例えばA. ホールによれば、(8)が(9)を表現しえないのは、サリーを好きな男はみな自分自身の母親を好きであるという情報と(8)の表現する内容から推意(implicature)として(9)が導かれるからである¹⁰。つまり、発話された文の内容の候補のうち、発話時に共有されている情報を前提として推論的に導かれるようなものはM

弱い合成性はなぜ「使えない」のか

内容ではなく推意であるということである。また、これに関連してホールは、モジュレーションが生じるのはあくまでもローカルなレベル、すなわち、文の構成部分の内容が合成されるレベルに限られ、文のレベルでモジュレーションが生じることはないと論じている。文の内容と前提情報という命題間での推論によって導かれるのは推意である一方、モジュレーションはあくまでも文に満たない範囲での文脈の影響によるという考えである¹¹。

さて、以上の解釈の過多問題及びそれに対する応答は C_{wco} にどのような関係するだろうか。まずわかるのは、TCP への批判はやはり、モジュレーションという語用論的なプロセスの意味内容へ対する影響を認めるという点に集中しているということである。合成性の観点からみれば、これは注目に値する。というのも、2 節でみたように、モジュレーションを認めること自体が直ちに C_{co} の不成立をいみするわけではないからである。解釈の過多問題は、あくまでも意味論的な文脈概念と語用論的な文脈概念に関する議論、言い換えればモジュレーションの内実に関するものであり、そこから合成性に関する何らかの含意が直接的に得られるわけではない。

また、語用論的な文脈の影響を認めるか否かということが論じられる際、そこで C_{wco} の成立可能性が実は問題とされていないという点も非常に興味深い。(7) が示すように、モジュレーションが複合表現のレベルで生じていると考えることができる例は少なくない。また、ホールのように文レベルでのモジュレーションを認めないという立場は、言い換えれば複合表現レベルのモジュレーションは認めており、このいみで C_{wco} が成立しているはずである。それにも関わらず、TCP の妥当性という文脈において論じられるのはあくまでもモジュレーションのみであり、 C_{wco} の必要性が明示的に述べられることはほとんどない。

では、レカナティ自身はどのように考えているのだろうか。彼は複合表

現の意味内容決定の際に文脈が影響するのは「当然¹²⁾」であり、その根拠として弱い合成性を形式的に定義した P. パギンの「意味関数はそもそも文脈という項を含んでいる¹³⁾」という言葉を引用している。すなわち、 C_{CO} においてすでにその形式的定義に組み込まれている文脈がさらに意味関数の第三の項として含まれたとしても、それは何ら新たな概念を必要としているものではなく、したがってこのような拡張を阻むものはない、という主張である。これは、形式的には正しい考えである。確かに、広く認められている C_{CO} から C_{WCO} へ合成性概念を拡張することは可能であり、かつ非常に容易である。しかし、これはあくまでも C_{WCO} という新たな概念の定義可能性に関するものであり、その概念の有益さを根拠付けるものではない。

結局のところ、TCP における C_{WCO} の実質的な役割とその必要性を主張するためには、(7) が示すような意味内容の決定過程が存在することを示さなくてはならない。しかしながら、これに関してもモジュレーションという語用論的影響を合成的なプロセスに組み込むことに起因する問題がある。レカナティを始めモジュレーション（及びそれに類する文脈の影響）を認める論者によれば、モジュレーションを用いた意味内容の導出は正常な解釈者による解釈プロセスの理想化されたモデルであるが、ここでモデル化されている実際の解釈プロセスに我々は接近することができない。というのも、このプロセスは多大な文脈の影響のもと垂人格的な推論によって行われているからである。ここでの「推論」とは、命題間で行われる推論、すなわち先行する判断からさらなる判断を引き出すような推論ではないことに注意してほしい。M 内容を引き出す推論とは、近年の心理学において用いられる「推論」であり、これは常に無意識的で、努力を必要としない。レカナティは、M 内容を引き出すはこのような推論であり、対して推意を引き出す推論とは、自動的であれ合理的（命題間での推論）であれ、常に意識的な推論だと論じている¹⁴⁾。

弱い合成性はなぜ「使えない」のか

では、もしもレカナティがいうようにモジュレーションが無意識的で我々が接近できないプロセスをモデル化しているのなら、我々はモジュレートされる内容がどの段階で付加されるのかをいかにして知りうるのだろうか。なぜ (5) のメタフォリックな解釈が (6) のように単純表現のレベルではなく (7) のように複合表現のレベルで生じるといえるのだろうか。この点で TCP 論者が我々の意味合成に関する直観、すなわち (7) のようなプロセスの方がより受け入れやすいという直観にその根拠を求めることはできない。なぜならば、モジュレーションはあくまでも広範な文脈的影響を合成的意味論に即した形でモデル化するための手段であり、(6) と (7) で同様の結果を得られるのなら、(7) のように C_{wco} を用いた合成プロセスを措定する理由はないように思われるからである。モジュレーションを意味論に組み込む理由は、これまでのカプランの意味論では導出できないような様々な内容を合成的に導くことであり、それを可能とするようなプロセスがあくまでも現実の発話解釈の理想化されたモデルに過ぎないのなら、 C_{wco} という新たな概念を措定する必要のないより単純な理論、すなわち C_{co} に即した理論を採用すれば十分なのである。

以上の議論は、メタファーやメトニミーなどそもそも意味論的に分析すべきか疑問の余地がある現象だけでなく、TCP と伝統的な形式的意味論の両者が意味論的な現象だと認め、その上で異なる分析を与えている事例に対しても有効である。例えば量化表現の量化の制限に関して、

(10) Every student passed the exam.

(11) *EVERY STUDENT IN THIS CLASS ROOM PASSED THE EXAM*

(12) $\llbracket \text{every} \rrbracket^c = \lambda P \lambda Q. [\text{FOR EVERY } x \text{ SUCH THAT } P(x), Q(x)]$

(13) $\llbracket \text{every} \rrbracket_M^c = \text{mod}('every', c) (\llbracket \text{every} \rrbracket^c)$
 $= \text{mod}('every', c) (\lambda P \lambda Q. [\text{FOR EVERY } x \text{ SUCH THAT}$

$$\begin{aligned}
 &P(x), Q(x)] \\
 &= \lambda P \lambda Q. [FOR\ EVERY\ x\ SUCH\ THAT\ P(x)\ \&\ x\ WAS \\
 &\quad IN\ THIS\ CLASSROOM,\ Q(x)]
 \end{aligned}$$

(12) は ‘every’ の一般化量子分析をラムダ表記のもととしたものである。いま (10) が教室で教師によって発話されたとき、直観的には地球上すべての学生ではなく、この教室の学生のみが量化されており、したがって (10) は (11) の内容を表現している。この場合、(12) のように K 内容のレベルでは量化の制限に関する情報は含まれていないが、しかし (13) のように ‘every’ の M 内容のレベルでモジュレーションによって量化の制限が含まれ、そのあと ‘student’ の M 内容と合成されることが、(11) の内容導出にあたって C_{CO} のみで事足りることとなる。

実はこの分析は、J. スタンリーと Z. サボによるカプラン的意味論に即した量化制限の分析を、モジュレーションを用いて表したものである¹⁵。彼らは量化制限の議論において ‘every’ などの量化表現の意味特性に文脈鋭敏な変項を含むことで制限量化を可能にしているが、そのような手法をモジュレーションによって可能にしているのが (13) である。前節で述べたように、従来の形式的な意味論は文脈鋭敏性をすべて単純表現の意味特性もしくは論理形式上の情報へと還元する。量化制限のみならず、‘the’ が形成する確定記述の指示対象の固定や色述語における色の判断基準、所有格の問題に関しても、従来の形式的意味論の枠組み内で提案されてきた複雑な意味特性や論理形式を単純表現のモジュレーションへとスライドさせることで、TCP は C_{CO} が成立するような分析を提供することが可能なのである。

以上より、TCP の存在から直接的に C_{WCO} の必要性が生じるわけではないということがわかった。モジュレーションという語用論的影響を認めることとどのような合成性が成立するのかは互いに独立であり、TCP にお

弱い合成性はなぜ「使えない」のか

いて C_{wco} に比してより強い C_{co} が成立しうる分析が可能ならば、 C_{wco} を一たとえそれが成立するとしても—あえて措定する理由はないのである。このようなみで、 C_{wco} は「使えない」もしくは「使いどころがない」概念といえるだろう。

4. 合成性における文脈の役割

ここまで、TCP との関連から合成性概念のあり方をみてきた。本節では TCP から離れ、弱い合成性の成立・不成立条件を明らかにし、そのような条件と自然言語意味論の関係性から弱い合成性を批判する。

本節の議論に移るため、前節で論じた C_{wco} の「使えなさ」についても一度整理しておこう。前節での主張は、モジュレーションという文脈の影響及び TCP という発話解釈のモデルにおいては C_{co} のみで事足りる、すなわち、TCP における語用論的文脈が意味内容の決定に影響すると考えると、 C_{wco} のみが成立していると主張することが困難となるということであった。言い換えれば、TCP における C_{wco} の「使えなさ」とは、その（不）成立を正確に問う手段が存在しないようにみえるということに起因している。このような問題は、モジュレーションという形式的に分析することが困難な文脈概念を合成的プロセスに組み込む TCP 特有のものだといえる。というのも、文脈は合成性の定義上あくまで意味関数の一つの項として現れるのみだが、前節の議論はそのような文脈概念の内実に関わるものだからである。

ここまで述べてきたように、文脈の内実をより豊かにすればするほど、すなわちカプラン的文脈から離れれば離れるほど、いかなる側面がいかなる合成的プロセスで意味内容に影響するのかを現実の発話解釈に即した形で特定することは不可能に近くなる。例えばある文脈的情報が単純表現の意味内容を変動させ、そしてその他の文脈的情報が複合表現の意味内容導出に関わるという現象は、たとえそれが存在するとしても、少なくとも

TCP において明確化されうるものではないのである。ある意味論的分析がある定義のもとで合成的か否かを問えないという問題は、合成性の研究においてあまりにも致命的な欠点だといえる。合成性の研究は、抽象的には意味論全体が、そして具体的には個々の意味論的現象が、正確にどのような定義の合成性概念のもとで合成的、もしくは非合成的であるのかを述べる必要があるからである。

したがって本節では、TCP が直面している問題を避けるため、あくまでも意味論的操作の一つの項として文脈を捉えて合成性の有用性を論じていく。上記のように、ある合成性概念はその概念がどのような場合に成立しないのかが明示化される必要がある。例えば C_{CO} の場合、1 節で述べられたように、モンスターオペレータや明言されない構成素の存在がそれにあたるだろう。では、 C_{WCO} が形式的ないみで成立しないのはどのような場合だろうか。弱い合成性 C_{WCO} の形式的定義をもう一度確認しておこう。

意味内容の弱い合成性 C_{WCO} ：

すべての統語論的規則 σ について、次のような意味論的操作 γ_σ が存在する：

$$\mu_{WCO}(\sigma(e_1, \dots, e_n), c) = \gamma_\sigma(\mu_{WCO}(e_1, c), \dots, \mu_{WCO}(e_n, c), c)$$

実は C_{WCO} においても、モンスターの存在はその成立可能性に関して影を落とす。次のようなモンスターについて考えてみよう。以下 ‘In context 1’ は (15) のようなモンスターオペレータ CXT_1 と分析され、‘Taro’ や ‘busy’ は文脈非鋭敏的表現とする。

(13) In context 1, I am busy.

(14) In context 1, Taro is busy.

(15) $\llbracket CXT_1(\varphi) \rrbracket^c = \llbracket \varphi \rrbracket^{c_1}$

弱い合成性はなぜ「使えない」のか

いま、文脈1における発話者がジロウであり、文脈2ではタロウだとしよう。(13)と(14)が文脈2において発話されたとき、(14)は文脈鋭敏の表現を含まないため CXT_1 のもとでもタロウが忙しいという内容を表現するが、(13)は CXT_1 によって 'I' の指示対象がジロウとなるため、ジロウが忙しいという内容を表現する。

このとき、 C_{WCO} が成立していると仮定しよう。すなわちこれらの文に対して、 C_{WCO} における適切な意味関数及び意味論的操作が存在すると仮定しよう。まず(13)と(14)で内包されている文は文脈2において同一の内容を表現するため、(16)のようになる。そして CXT_1 と文 $\varnothing$ の内容を結びつける意味論的操作を γ_{CXT_1} とすると、(13)と(14)はそれぞれ(17)と(18)のような合成的手続きによってその内容が決定されていることになる。

$$(16) \mu_{WCO}('I am busy', c_2) = \mu_{WCO}('Taro is busy', c_2)$$

$$(17) \mu_{WCO}((13), c_2) = \gamma_{CXT_1}(\mu_{WCO}(CXT_1, c_2), \mu_{WCO}('I is busy', c_2), c_2)$$

$$(18) \mu_{WCO}((14), c_2) = \gamma_{CXT_1}(\mu_{WCO}(CXT_1, c_2), \mu_{WCO}('Taro is busy', c_2), c_2)$$

(17)と(18)における意味論的操作 γ_{CXT_1} は三項関数であり、そして(16)からわかるようにそれらの項の値はそれぞれ等しいため、(17)と(18)には同一の値が割り当てられなければならない。しかし上記のように、(13)と(14)の内容は異なっている。したがって、 C_{WCO} における意味関数 μ_{WCO} 及び意味論的操作 γ_{CXT_1} は(13)と(14)の差異を説明できないのであり、背理法より C_{WCO} は成立しない。モンスターは C_{CO} だけでなく、 C_{WCO} をも成立させないようなオペレータなのである。

モンスターによって C_{WCO} が不成立となるという事実は、 C_{WCO} の有益さについてどのような含意をもつだろうか。本稿は自然言語におけるモンスターについて詳細に論じることはない。というのも、カプランの意味論においてモンスターは非常に明確に定義される一方、いったんカプラン的

意味論から離れると、モンスターはその定義—指標詞の指示対象を変えるのか、文脈を変えるのか、それとも内容を変えるのか—が定まらず、ある定義のもとではモンスターが存在しその他の定義のもとでは存在しないという事態が生じており、これらの問題を本稿で論じる余裕はないからである¹⁶。したがって本稿はモンスターについて一般的な解釈である文脈変動者という立場をとるが、以下では文脈変動者としてのモンスターが存在したとしてもしなかったとしても、 C_{wco} の必要性はないと論じる。

ではまず、(15)のようなモンスター CXT_1 が自然言語に存在すると仮定しよう。この場合 CXT_1 は C_{wco} に違反するが、そのことが直ちに問題というわけではない。現に自然言語には合成性に反すると考えられている多くの現象が存在しており、それらが合成性にとって真正の反例なのか、それとも合成的な分析が可能なのかを探求することが合成性研究の一端だからである。 C_{wco} とモンスターの関係に関して本当に問題なのは、モンスターの存在は C_{wco} だけでなく C_{co} にとっても脅威となるということである。より詳しくいえば、モンスターと同様の振る舞いをするオペレータが存在するとき、そのオペレータに関して C_{wco} と C_{co} は全く同一の理由によって成立しなくなる。 C_{co} の定義をもう一度確認しておこう。

意味内容の合成性 C_{co} ：

すべての統語論的規則 σ について、次のような意味論的操作 γ_σ が存在する：

$$\mu_{co}(\sigma(e_1, \dots, e_n), c) = \gamma_\sigma(\mu_{co}(e_1, c), \dots, \mu_{co}(e_n, c))$$

1 節で述べたように、 C_{wco} と C_{co} の違いは意味論的操作に単独の項として文脈が現れるか否かである。複合表現の意味内容を導く合成的プロセスに文脈が介在することで、例えば明言されない構成素の存在は—前節で TCP 的な分析を否定したが— C_{co} と C_{wco} の成立可能性の差異を明確にしていたのだった。しかしながら文脈変動者としてのモンスターに関してい

弱い合成性はなぜ「使えない」のか

えば、 C_{wco} と C_{co} の間にその成立可能性について違いはない、というのも、意味論的操作に文脈が単独で現れたとしても、そこでの文脈はあくまでも実際の発話文脈であり、モンスターによって変動することはないからである。(13) と (14) でいえば、これらが文脈 2 で発話されたならば意味論的操作 γ_{CXT1} 上で使用されるのは文脈 2 であり、第三の項として文脈 2 が現れても現れなくても、文脈 2 において ‘I am busy’ と ‘Taro is busy’ が同一の内容をもつならば意味論的操作は同一の内容を導出せざるを得ない。

これは、モンスター、より一般的にはオペレータが本質的に意味のレベルに関わるということに起因している。例えば様相オペレータの存在は、合成性が外延ではなく内包のレベルで成立することを要請するように、モンスターの存在は合成性が意味内容より抽象的な意味のレベル（例えば意味特性）で成立することを要請しており、本質的に意味内容に関する合成性概念である C_{wco} において文脈の項が単独で現れるということはいかなる利点ももたないのである。したがって、文脈変動者としてのモンスターが存在したとき、 C_{wco} は C_{co} が成立しないことと全く同じみで成立しないのであり、 C_{wco} が成立しないという事実が C_{co} のそれとは異なるいみで何らかの有益さを生み出すということはない。明言されない構成素が C_{co} と C_{wco} の間の差異を明らかにするのは、意味内容という同一の意味レベルにおいて明言されない内容が追加されるように思われるからであった。しかしモンスターは付加的内容の有無には関わらないため、単純表現の意味内容に関して形式的には同一の導出プロセスをもつ C_{co} と C_{wco} の間にいかなる差異も生じないのである。

では次に、モンスターが自然言語に存在しないときについて考えよう。このとき、形式的には C_{wco} はあらゆる場合で成立しうる、というのも、モンスター以外に C_{co} の成立を脅かすのは明言されない構成素であったが、もし明言されない構成素が本当に存在するとしても C_{wco} は一そのために

提案されたのであり当然だが—これを分析可能だからである。上で述べたように、 C_{WCO} は意味内容レベルの合成性概念である。したがってモンスターが存在しない、言い換えれば発話文脈以外の文脈を必要とするような現象が存在しないとき、 C_{WCO} における意味論的操作において考慮される文脈はただ一つであり、この文脈が複合表現の合成プロセスにおいて意味内容を変動させると考えることで、その例外は存在しないことになる。

ここで注意が必要なのは、合成性が成立しているとき、そこには二つの可能性があるということである。まず一つは、我々の意味に関する直観に即した形で定義された合成性、言い換えれば、その成立が望まれる合成性について、それに反するように思える意味論的現象に対して新たな分析を与え、結果的に例外がなくなった場合である。第二の可能性は、そもそも例外がありえない形で合成性が定義された場合であり、このとき合成性は空虚に成立する。では、 C_{WCO} はどちらのいみで成立しているのだろうか。第二の選択肢から考えていこう。空虚に成立する合成性が何らかの形で役立つものであると主張することは難しいように思われる。というのも、もしも合成性が成立することが予め約束されていたならば、どのような意味論的分析でも合成的となるのであり、意味論構築に合成性という制約を課す意義が霧消してしまうようにみえるからである。さらに、たとえ空虚ないみで合成性が成立していることに何らかの意義があるとしても、そこで成立している合成性が C_{WCO} である必要はあるのだろうか。

例えばモンタギュー意味論においては、表現の外延を変動させる要素（指標）に独立な意味概念である「意味（meaning）」のレベルでのみ合成性が成立しているが、これはカプランの意味論における意味特性にあたるため、モンタギュー意味論は意味特性の合成性 C_{CH} のみが成立していることになる。そして、1節で述べたように意味特性自体はそもそも文脈鋭敏的でないため、 C_{CH} もまた空虚に成立する合成性ということになる。空虚にでも合成性が成立する意義がもしも存在するならば、それはまさにモ

弱い合成性はなぜ「使えない」のか

インタギューが述べたように統語論と意味論の間に—それがどのような意味概念に関するものであったとしても—準同型写像が存在するということだろう。しかしこの役割を果たす合成性としてはすでに C_{CH} が存在しているのであり、わざわざより複雑な概念である C_{WCO} を指定する必要性はないのである。

では、第一の選択肢、つまり空虚ではないような形で成立する合成性として C_{WCO} を捉えるためには、どうすればよいだろうか。前節の議論を思い出そう。TCP では語用論的文脈のもとであれば C_{CO} が成立すると主張したが、これはモンスターを除けば C_{CO} があらゆる場合で成立しようと主張しているのに等しく、したがって実は C_{CO} もまた空虚に成立してしまうことになる。何度か述べているように、 C_{CO} においても C_{WCO} においても、文脈概念にどれほどの情報を読み込むのかによって合成性の成立条件は大きく変わってくる。制限されない文脈概念を使用してしまうと、合成性の成立条件を明確化するのが非常に困難となり、合成性に関する議論そのものの有益さに影を落としかねない。このようないみで、合成性が空虚に成立するという問題は C_{WCO} にも C_{CO} にも起こりうるのである。

しかしながら、文脈の形式性という点において C_{CO} と C_{WCO} は大きく異なっている。確かに C_{CO} と C_{WCO} は曖昧な定義の文脈概念のもとあらゆる場合に成立しうるが、しかし C_{CO} に関しては文脈を形式的に細分化することが可能であった。すなわち、カプラン的文脈（もしくはその拡張）を使用することで、いかなる文脈的側面が必要であり、どのように意味内容に作用するするのかを明示的な形で論じることが可能であった。この場合、例えばこれまでの分析では合成性に反するような意味論的現象に直面したとき、カプラン的文脈を使用することで C_{CO} に即した、すなわち十分に制限された形で合成的な解決策を提示することが可能となる。このような探究の結果として成立するのが空虚でない合成性なのである。

対して C_{WCO} はどうだろうか。 C_{WCO} において形式的に細分化されうる

文脈概念は存在するだろうか。カプラン的文脈のみでは事足りないのは明らかだろう。というのも、カプラン的文脈はあくまでも単純表現の意味特性に要請される限りの文脈情報であり、そこから複合表現の意味内容合成の段階では一切影響しないからである。すなわち、 C_{WCO} が空虚でない概念だと示すためには、カプラン的文脈ではないが意味論的に制限された文脈概念が必要なのである。しかしながら、このような文脈を探し出すのは非常に困難である。なぜならば、そのような文脈の影響は、意味特性上に現れることがないだけでなく、論理形式上にも現れてはならないからである。論理形式上に現れるとは、すなわち対象言語の表現だということである。したがって、いったん論理形式上にそのような文脈の役割を担う表現—例えば複合表現の意味内容を変動させるようなオペレータなどが現れたならば、その表現自体の意味特性が文脈情報を要請しているのであり、ここでの文脈はカプラン的文脈に内包されることになるのである。結局のところこのような提案は、カプラン的文脈のもとでの C_{CO} に即した非常に複雑な分析を提出しているに過ぎない¹⁷。

以上、合成性の形式的な定義から C_{WCO} の不成立条件を探り、そしてモンスターとの関わりや文脈の細分化という視点で C_{WCO} の有益さを論じてきた。モンスターが自然言語に存在するならば確かに C_{WCO} は不成立となりうるが、しかしその条件は C_{CO} と全く同一であるために C_{WCO} を指定する理由はない。対してモンスターが存在しないならば C_{WCO} は文脈に関して立ち入らない合成性の定義においては必ず成立するが、空虚に成立する合成性としてはすでに C_{CH} があり、したがってここから C_{WCO} の必要性は生じない。最後に、形式的に細分化されうる文脈においては C_{CO} のように C_{WCO} もまた意義のある概念となりうるが、しかし C_{WCO} においてそのような文脈概念は存在しないようにみえることから、 C_{WCO} の有用性を示すには至らないとした。TCP から離れたとしても、 C_{WCO} が「使える」合成性概念となることはないのである。

弱い合成性はなぜ「使えない」のか

まとめ

本稿は、弱い合成性と呼ばれる合成性概念に関する論考であった。まず1節で弱い合成性 C_{wco} を含めた三つの合成性の定義及び一般的に使用される文脈鋭敏の意味論を、そして2節で C_{wco} と関係の深い TCP を導入した。このような準備ののち3節では、TCP における意味内容の導出はあくまでも現実には接近できない発話解釈プロセスをモデル化したものに過ぎないということから、明言されない構成素など C_{wco} のもとでのみ導出可能であるようにみえた意味論的現象も、一般的な合成性 C_{co} によって分析可能であり、したがって C_{wco} の必要性があるとはいえないと論じられた。続く4節では、合成性の形式的な定義を再確認し、 C_{wco} の成立条件としてモンスターの存在が問題となることを明らかにしたが、しかしモンスターが存在したとしてもしなかったとしても、その他の合成性概念に比して C_{wco} が何らかの利点をもつようなことはないことと示された。

3節と4節の議論の関係を文脈の定義という視点から簡潔にまとめると、次のようになる。もしも TCP のように文脈概念をあいまいに使用してしまうと、 C_{wco} のみならず C_{co} もまた非常に緩いみで成立してしまうため、 C_{co} で事足りる。対して厳密ないみで文脈を定義しようとしても、 C_{wco} においては C_{co} におけるカプラン的文脈にあたるものが存在しない。したがって、いかなる文脈の定義においても C_{wco} が我々に何らかの有益な洞察をもたらすようなことはないのである¹⁸。

注

¹ 本稿のカプランの意味論とは、主に Kaplan (1989a) で展開された意味論を指す。

² Kaplan (1989a) では割り当て関数は文脈のパラメータとして扱われていないが、しかしのちにカプランは「文脈は指示対象、すなわち直接指示的表現の内容を決定するために必要なあらゆるパラメータのパッケージである。文脈をこのように抽象的に捉えると […], 変項の自由な出現に対する値の割り当てを単に文脈の付加的側面として扱うことは自然である。」(Kaplan (1989b),

- p. 591) と述べているうえ、一般的に変項として扱われる表現はその意味内容として対象をもつため、本稿でも割り当て関数を文脈のパラメータとする。
- ³ 本稿の合成性の定義はすべて Pagin&Westerståhl (2010) の表記に準じている。
- ⁴ ペリーが明言されない構成素という概念を初めて導入したのは Perry (1986) であるが、この論文でのペリーの主張は、思考が明言されない構成素をもっており、我々自身が我々の思考の明言されない構成素である、というものだった。
- ⁵ Cf. Recanati (2002), p. 317.
- ⁶ 明言されない構成素やそれに類する分析として、色述語に関しては Travis (1997)、制限量化に関しては Back (1994)、そして所有格に関しては Recanati (2001) などを参照。
- ⁷ 関連性理論の代表的論者である R. カーストンによる次の一節が端的にこのような立場を表している。「自然言語の文のコード化された意味〔意味特性〕に説明を与えるということは、本質的には、別の表示体系への翻訳を行うことにほかならない、という点には同意できよう。しかしながら、これが実質を欠く試みであるという批判に対しては、その別の表示体系こそが、「実在関係的な」意味論（‘real semantics’）が与えられる体系、すなわち、世界の内の対象および事態と関係づけられる体系である、という主張をもって対抗することができる。」(Carston (2002), p. 58, 邦訳 pp. 88-89. [] 内は引用者による。)
- ⁸ 本稿での TCP の形式的な特徴づけは、主に Recanati (2010) 第1章で展開されたものに基づいている。
- ⁹ 解釈の過多問題を扱っている代表的文献として、Stanley (2000; 2002) などが挙げられる。(8) と (9) は、スタンリーによる例 (Stanley (2002), pp. 165-166) を改変したものである。
- ¹⁰ Cf. Hall (2009), pp. 356-357.
- ¹¹ ローカルなプロセスとしてのモジュールーションに関してはカーストンも同様の見解を示しているが (cf. Carston&Hall (2012)), しかし合成性に関してホールとカーストンの両者が完全に一致しているとは言い難い。というのも、カーストンは意味特性レベルでの合成性のみで十分であると考えている一方で、ホールは関連性理論においても意味内容レベルでの合成性が成立することを要請しているからである。
- ¹² Recanati (2010), p. 45.
- ¹³ Pagin (2005), p. 313.
- ¹⁴ 「言われていること〔M 内容〕」の方は、無意識的な第一次的語用論のプロセスを通じて単純に把握されるのに対して、暗意〔推意〕に関しては、話し手があることを言ったという事実にとわれわれは意識的に注目し、その事実と背

弱い合成性はなぜ「使えない」のか

景的知識を用いて、話し手が口に出さずに伝達しようとしていることを推論によって理解する。〔…〕「言われていること」の把握は、われわれが何かを視覚で捉える場合と同じく、亜人格レベルで行われる。」(Recanati (2004), p. 39, 邦訳 pp. 81-82. [] 内は引用者による。)

¹⁵ Cf. Stanley&Szabó (2000).

¹⁶ モンスターの解釈に関する最新の議論に関しては Rabern&Ball (2017) が参考になる。

¹⁷ 意味特性にも論理形式にも現れないが意味内容に影響しうる形式的な文脈的要素として、言語環境と呼ばれる論理形式上の位置情報及びそれを用いた合成性概念が提案されている (cf. Pagin&Westerståhl (2010), pp. 260-261). ある表現の言語環境とは、その表現が論理形式上どのような位置に現れているのか、すなわちその他の表現との構造的な上下関係を表しており、例えば文は単独で現れる場合と何らかのオペレータに内包される場合で言語環境が異なりうる。しかしこのような情報は、モンスターに関する議論で触れた意味のレベルに関わるものであり、したがって C_{WCO} にとって有益なものではない。言語環境と合成性の関係については、高谷 (unpublished) を参照。

¹⁸ 本稿の作成にあたって有益なコメントを下さった天本貴之氏、横路佳幸氏、そして匿名の査読者に感謝する。

参考文献

- Back, K. (1994). "Conversational Implicature". *Mind & Language* 9(2): 124-162.
- Carston, R. (2002). *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell. (西山佑司ほか訳. (2008). 『思考と発話——明示的伝達の語用論——』研究社.)
- Carston, R. & Hall, A. (2012). "Implicature and Explicature". In H. J. Schmid (ed.), *Cognitive Pragmatics, vol. 4 of Handbooks in Pragmatics*. Berlin: Mouton de Gruyter. 47-84.
- Hall, A. (2009). "Semantic Compositionality and Truth-Conditional Content". *Proceedings of Aristotelian Society* 109(3): 353-364.
- Kaplan, D. (1989a). "Demonstratives". In J. Almog, J. Perry & H. Wettstein (eds.), *Themes from Kaplan*. Oxford: OUP. 481-563.
- Kaplan, D. (1989b). "Afterthoughts". In J. Almog, J. Perry & H. Wettstein (eds.), *Themes from Kaplan*. Oxford: OUP. 565-614.
- Pagin, P. (2005). "Compositionality and Context". In G. Preyer & G. Peter (eds.),

- Contextualism in Philosophy: Knowledge, Meaning and Truth*. Oxford: OUP. 303-348.
- Pagin, P. & Westerståhl, D. (2010), "Compositionality I: Definitions and Variants", *Philosophy Compass* 5(3): 265-282.
- Perry, J. (1986). "Thought without Representation". *Supplementary Proceedings of the Aristotelian Society* 60: 137-152.
- Rabern, B. & Ball, D. (2017), "Monsters and the Theoretical Role of Context", *Philosophy and Phenomenological Research*, Online version. URL: <https://onlinelibrary.wiley.com/doi/abs/10.1111/phpr.12449>
- Recanati, F. (2001). "What Is Said". *Synthese* 128(1&2): 75-91.
- Recanati, F. (2002). "Unarticulated Constituents". *Linguistics and Philosophy* 25(3): 299-345.
- Recanati, F. (2004). *Literal Meaning*. Cambridge: CUP. (今井邦彦訳. (2006). 『ことばの意味とは何か ——字義主義からコンテキスト主義へ——』新曜社.)
- Recanati, F. (2010). *Truth-Conditional Pragmatics*. Oxford: OUP.
- Stanley, J. (2000). "Context and Logical Form". *Linguistics and Philosophy* 23(4): 391-434.
- Stanley, J. (2002). "Making It Articulated". *Mind & Language* 17(1&2): 149-168.
- Stanley, J., & Szabó, Z. (2000). "On Quantifier Domain Restriction". *Mind & language* 15(2&3): 219-261.
- 高谷 遼平. (unpublished). 「主張内容を合成的に導く：一般合成性に基づく単純な意味論観の擁護」.
- Travis, C. (1997). "Pragmatics". In B. Hale & C. Wright (eds.), *Companion to the Philosophy of Language*. Oxford: Blackwell. 87-107.